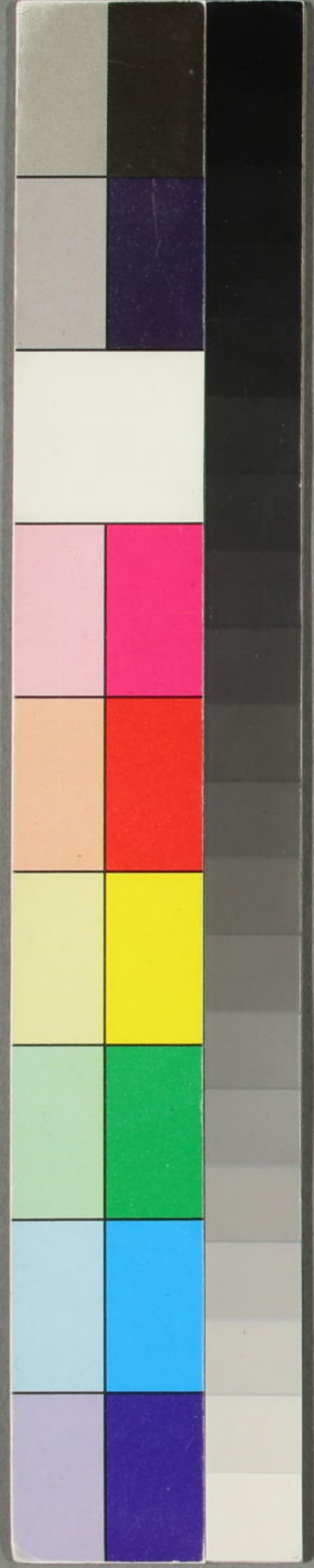


松島園徳

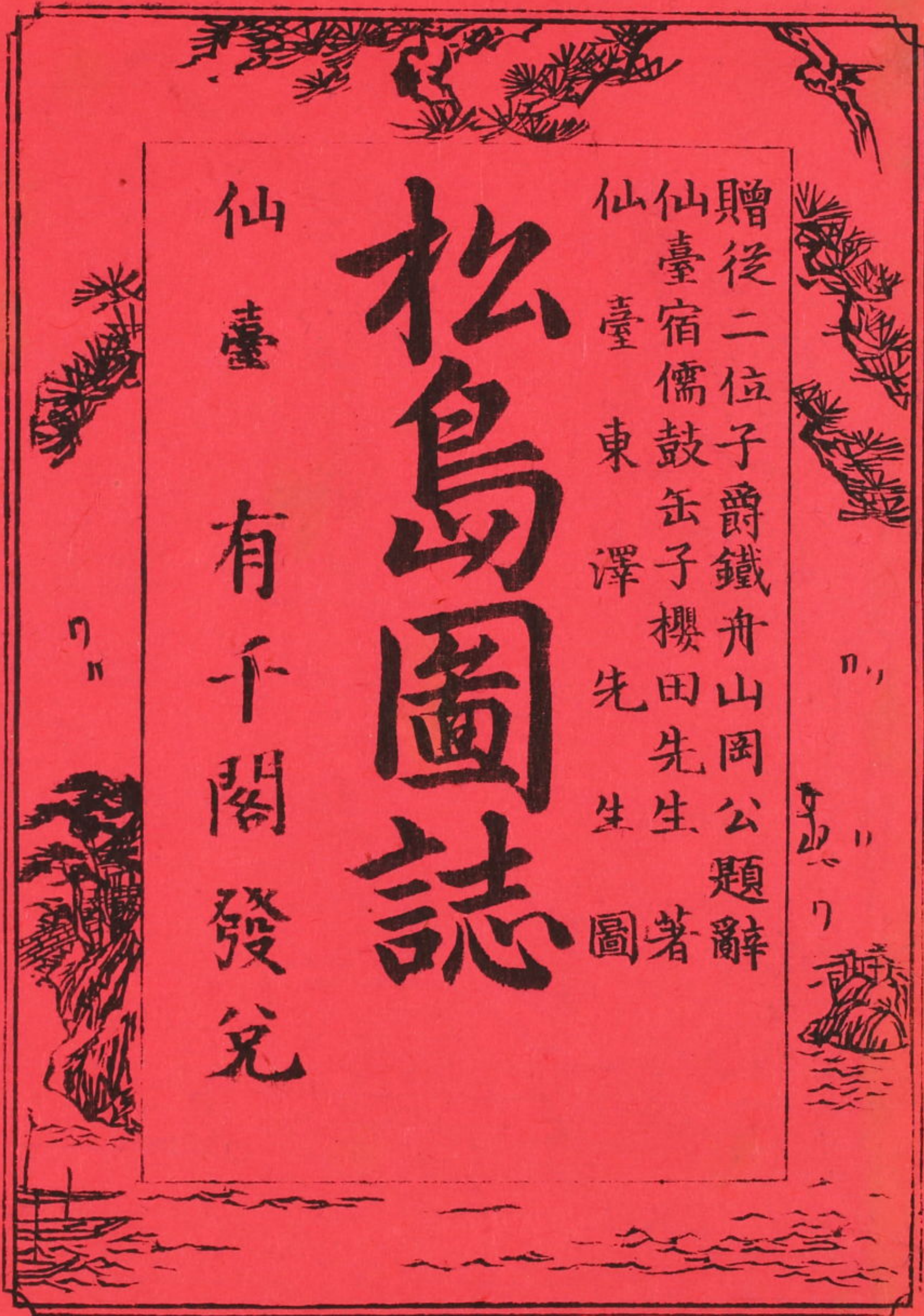


松島圖志

仙臺 有千閣發兌

松島圖志

贈從二位子爵鐵舟山岡公顯辭
仙臺宿儒鼓缶子櫻田先生著
仙臺東澤先生圖

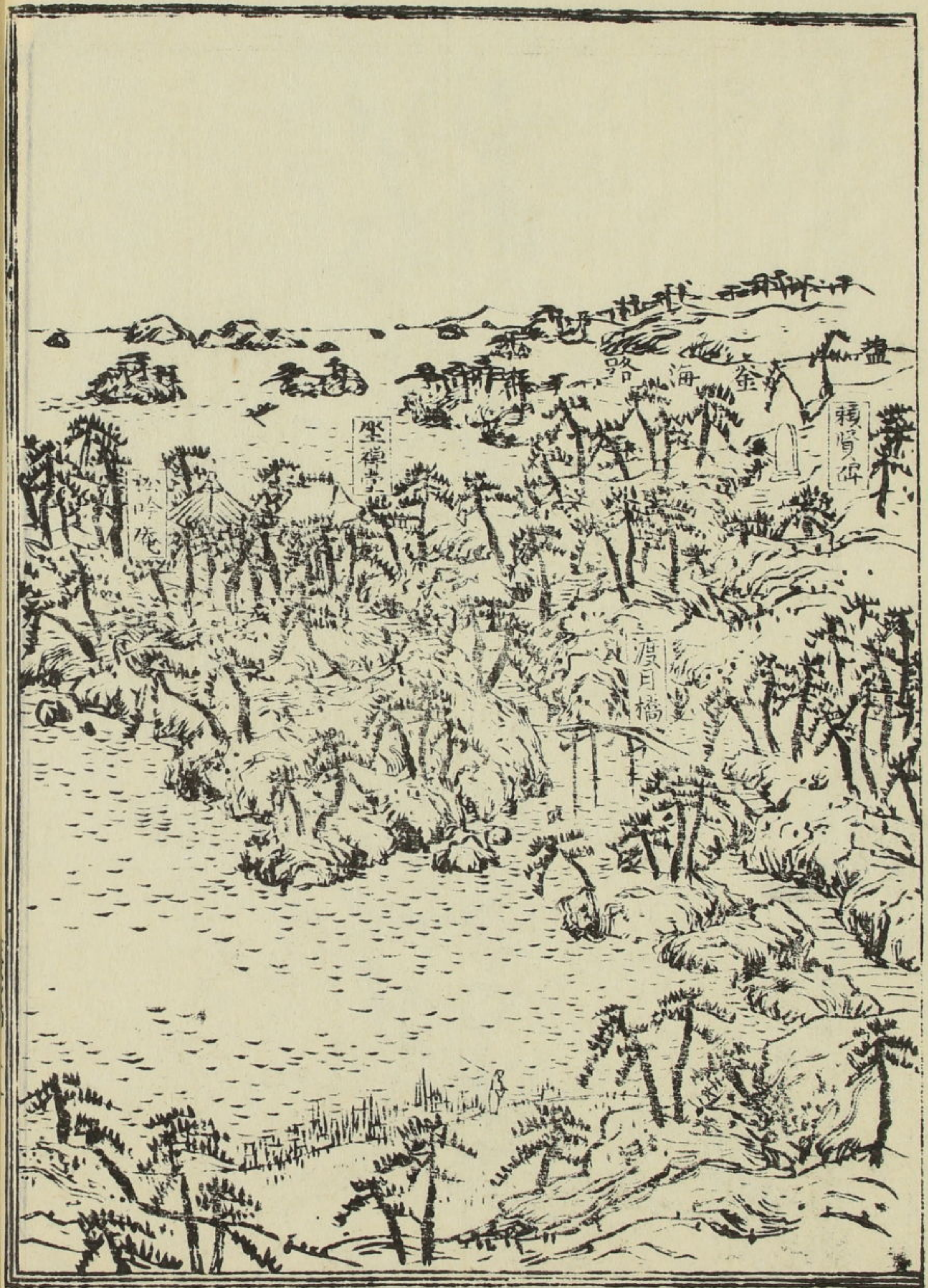


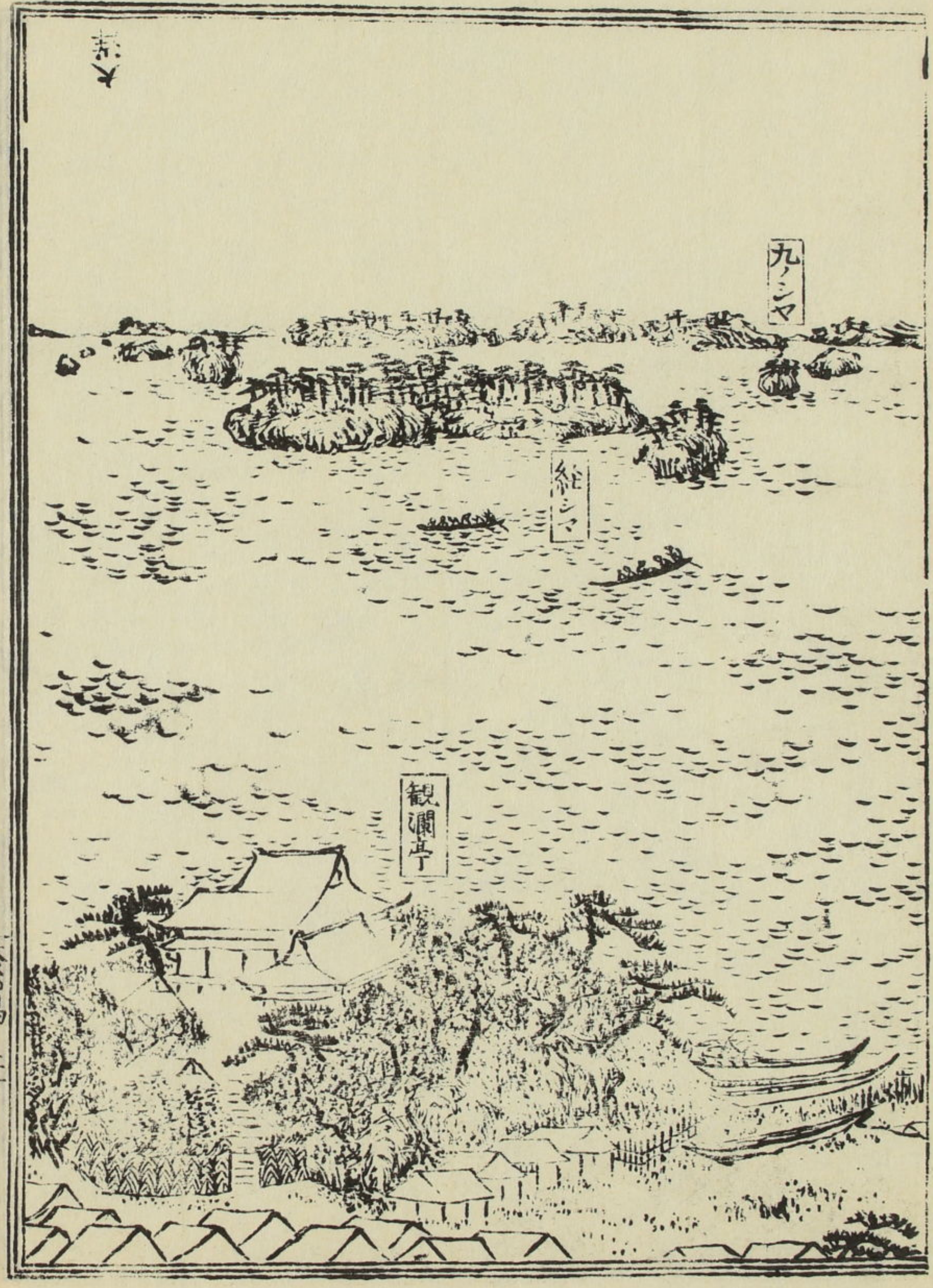
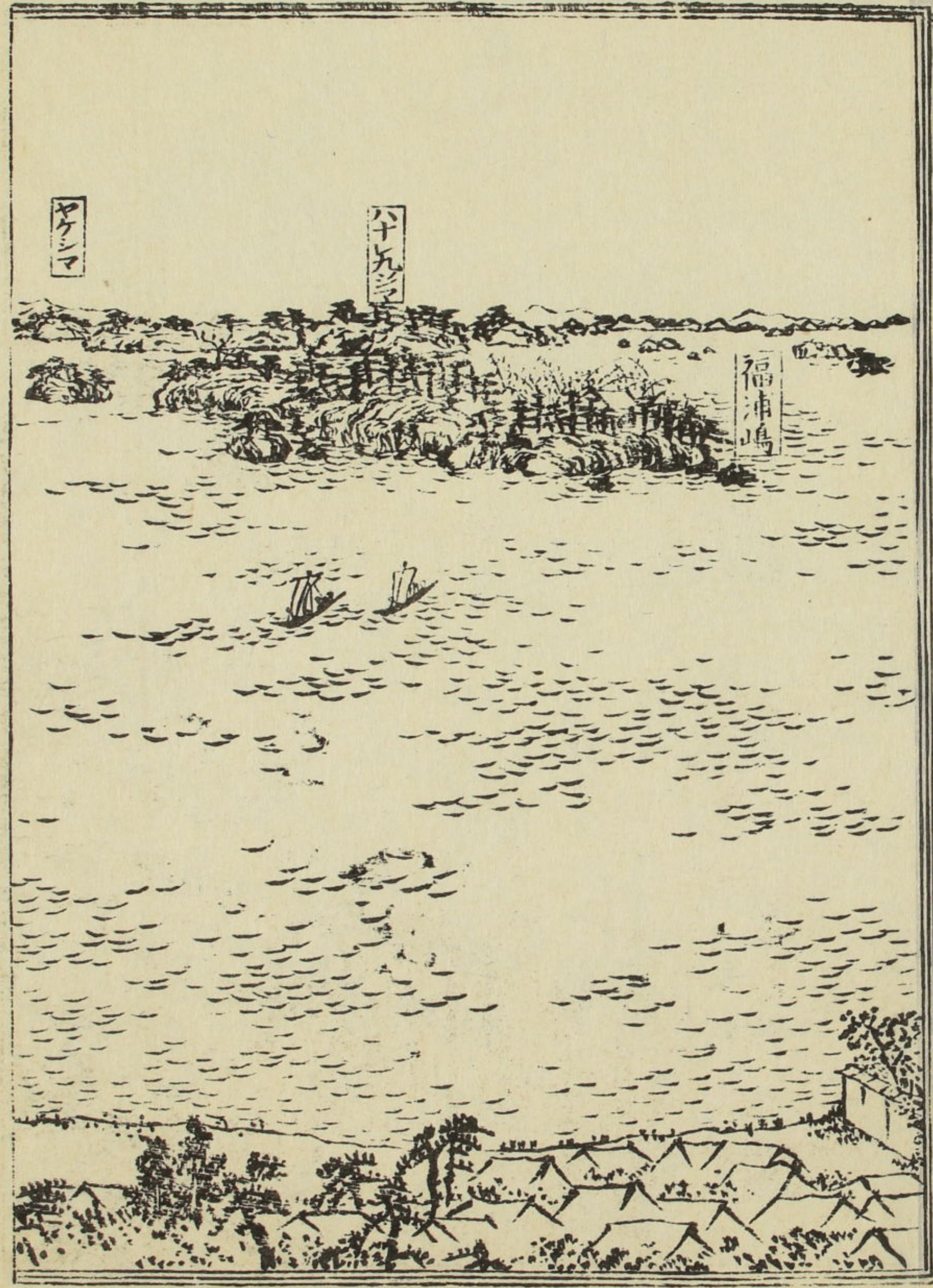
松尾圖譜

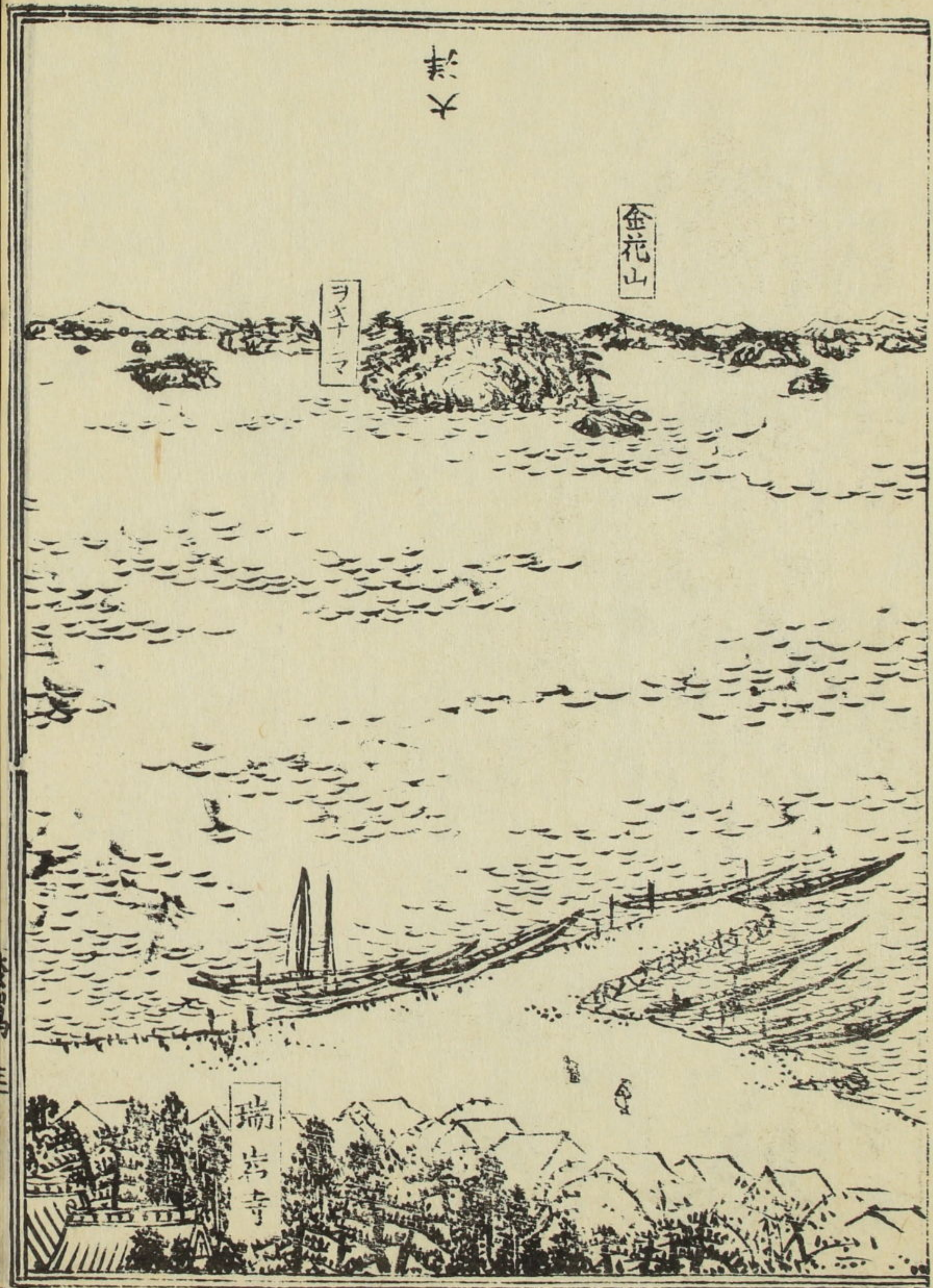
松尾圖譜

松尾圖譜

松尾圖譜







松嶋圖誌

抑名におふ松嶋ハ陸奥州宮城郡松嶋村にあり安藝云
洲嚴島丹後洲天橋立とおちひて日本の三景と稱
を中よも天成の奇絶四時小随くさほくに晨夕
うつりかてて極あるるなく區域廣大し七日を經て
詠めありする事と誠に此の松嶋伐天下無雙とす也
古人も云り叔松嶋と名はけしる事
鳥羽院の時時文治年中見佛上人は地は位一まひこ
に勅願によりて大内藏康光卿を勅使として此処ふ
ひめ松千株をくゑさをもしてより其頃千松嶋と稱せし

とらや後々略して松嶋とよぶ古歌よも松嶋とよむといへり
今ある松ハ千株万株の数を志るべしは堂いとも同村
此内阿弥陀山といふ処は勅使松とよぶもの二株何れ
一株を圍ハ尺餘一株ハ圍九尺余ありこれ即古くゑさせ
たもふ松ありとぞ此文政の頃より凡六百九十餘年の
星霜を經るといへども弥茂り榮て緑の色殊に深し
按ずるに松嶋の名ハ文治より以前此和歌ふも尺一これハ
以時よりばまうまをあらざるべし或も松嶋の名ある
よもつとく子株の松をも裁はせぬふにや志る屋うらけの
一説或人乃案内記に達磨大師この松嶋よとたふ

多し大澤松考の南にありといふ処に未らせり小姓聖徳太子待
たまひし待嶋といふや、以説に據る時を待の字を用
ふべし。鳥羽帝の時より五六百年もあつたり
也。それども信ずるにたゞの又案内記に見佛上人法嶋
にて日々法華を讀誦志す。小姓鎌倉の二位乃禪尼等
なひて天竺の佛舍利二粒姫子松千本に清文をそへて
贈りしまふも松考といふこと。まことに禪倉の時よりあ
に松嶋の名ありし古きもの出れば是亦信ずるにたゞ
松嶋といふも總名にして其内小數多の勝地靈跡あり世々
八百八島ありなどいふや、大小の嶋と數多をいふこと。

今夫れをかぞふるに松嶋村は屬して名ある嶋三十五
あり五大堂の島二つ并々甚ちひさしな嶋成
合せくはつる時を四十にもいはせり其餘他村に屬し
て松嶋乃海面小はくなり眺望に入る島を數十と
いふまじりみち海面はおたゞひて碁碁に石をもり
しるが、ぬくもつきも争て奇狀を呈し中にも古より
名高に雄嶋なり名なき小嶋ハ野も多る。是れ
其考、何れも天造の自然にやてあより見ると後より
詠むるときぬく乃形残なり。棹をすしめ舵をめぐら
に随ふ千態萬狀かぞへ尽し難しが、左に里人といふ
どもあはれくそ名をたゞざるもありはまは其又也。

風景の羨なる事春夏秋冬をこくび又晝夜昏且を
るごとくびこき遊人の志る所なり中にも見りなほま
雪北朝な里見なきし里人を目茂驚うし思ひはも
身をうちし叫むんとす誨に人間よりるべ境畧に非
きやいふ○毎年七月十六日乃夜大施饑鬼とく味上よ
百八の燈籠を流し遠近群聚して是を思る其光沛を
涵し天茂照しる数多の崎く燈火の流るに随て或ハ
あふはき或ちかくるさぬたふべ記詞なり

○長老坂 仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂有
は交りたりめり松嶋の海面を見る昔瑞岩寺臨濟

関山法心上人松嶋へ下りて時法衣にて衣をぬきまする
な長老坂と名づくといふ此圃の端傍の村に傍位何なる
子をいひた繁して長老といふ

按ずるに今眺浪の字を用くは所体上哉眺望よは
ゆゑに名づくといふも好事の文士附會するなるべし或を
坂長く疲労し身老るかに長老と名づくとも附會ハ
説あり

○西行もぐり松 長老坂名の傍に山上にあり俚俗の説ふ
西行も 鳥羽院の北面乃士たり密に宮女も通せり
そそ女度りとなまはりあはれと云に西行其詞を解せ
僧とちり諸國を巡りて爰に至る乃の傍松林下は牛に草

うし翁ありてそ牛飽ざるをあこびありせ罵りけきハ
翁のたまは哉少く公解子向しに伊勢の休阿漕がうしに
ひく綱も度うさなきばあはれせるといふ言を以て答ふ
西行耻しくはまよりぬまり依て西行もどくは松やいふ
翁を即松嶋の明神を里とそ

一説に翁は松嶋よ来る石の入口まで童子の牛をひく
よあふて和歌をよめりける月にそふ桂男は通ひ来て
すしたちむむ誰子あはれん童子ききて雨をふり
鹿もかひり旁もぬりくばくむさくもたが子あはれん
とよみくく西行大に耻し側なる様を手おたるべと

して帰れぬ今その儀ハかきく松の大木ありそ童子
を松嶋の鎮守山王権現乃化身也とそ
松嶋かきくくを
ちくたが老石

そく石あり僧
の形に似たり

- 山王社 松嶋村の徳也 淳和天皇乃清時慈覺大
師江島坂本比山王を以れに勧請しぬふ初々五大堂
天童菴の側にありし哉寛永十九年の表雲居和尚
々乃まに移せりと云毎年四月中は申乃日中の刻糸或有
○観音堂 木像の観音慈心佛都の作と毎年四月十八日
糸或有
- 天麟院 瑞岩すの南横町といふ所乃裏にあり

先太守貞山公の清姫にて徳川氏越後少將忠輝
朝臣の夫人となりぬひしが忠輝朝臣ありし飛弾列
に謫せしむるひし後夫人を仙臺にぬり落飾し西館
といふまゝに住ぬひ老後以死に移り六十八歳にて終り
給ふを爰に葬て此寺建立はとて

○圓通院 瑞岩寺の西南生薑浦といふこゝに在

先太守義山公の清嫡子越前守光宗公十九歳にて早
世しぬふを爰に葬りて此寺を建立はとて

○瑞岩寺 青龍山瑞巖圓福寺と称し山城花園ぬふ
の末流にて臨濟宗也 凡松考にある所の
古寺臨海あり 古寺、松鳶寺といふ

仁明帝承和五年たゞめり此寺を建るといふは此寺

寺、新山延福寺と称して天台宗なり其後最明寺入道

時頼 鎌倉頼朝 以死に來り法心上人となりて天台を改め

て禪宗とて法心を開祖とて松嶋山圓福寺と称す

そきより大覚覺雄智覺覺満明極などいふ唐僧來り

る位持以九十一世義山和尚に至りて鎌倉建長寺の派と

なり九十二世実堂宗中和尚より妙心寺派となり慶

長十年 一説よ
九年 貞山公再び造営しぬひ同十四年落成

永く伊達家の宗廟とて寛永十三年 義山公先君

乃遺命によりて雲居和尚を請待し中興関山とて改

て瑞岩圓福寺と称し承和五年戊午より文政三年

一説に時頼入道旅僧の姿となりて行脚して松嶋に
来り給ひ頃五大堂の舞臺あり能與行ありし
哉時頼も多し乃人にまねき見抱ぬひいがか時
の役者此つゝなきも時頼おもつて声高く笑はき
しを僧徒怒りて時頼を打擲なごせしやばやりぬ
いひこむ其処哉逃去り無相窟にかくれ一宿
志ぬひ鎌倉に及びて後天台僧を追放し法心上人
を関山とて臨湊宗を改め松嶋山圓福寺と名づ
くと云ふ○按むるに又一説に松嶋寺天台の因基を

淳和天皇の御時天長五年坂本山王を松嶋
に移し慈覚大師哉別當と三千坊十方石の法
寄附あり其時多音亀山圓福寺と云 龜山天皇
の御時文永年中に至りて松嶋山圓福寺といふと
はるる未審○法心上人俗名真壁平四郎僧也成
宋の時に入唐し徑山寺の無準といふ僧に從て法
を受け帰國して後法をひけり香に死せり
元亨釋書東國高僧傳等に見えり偈あり遠入
徑山分風月歸開圓福木道場法心透得無一物
元是真壁平四郎又新後撰に見仏上人の和言て

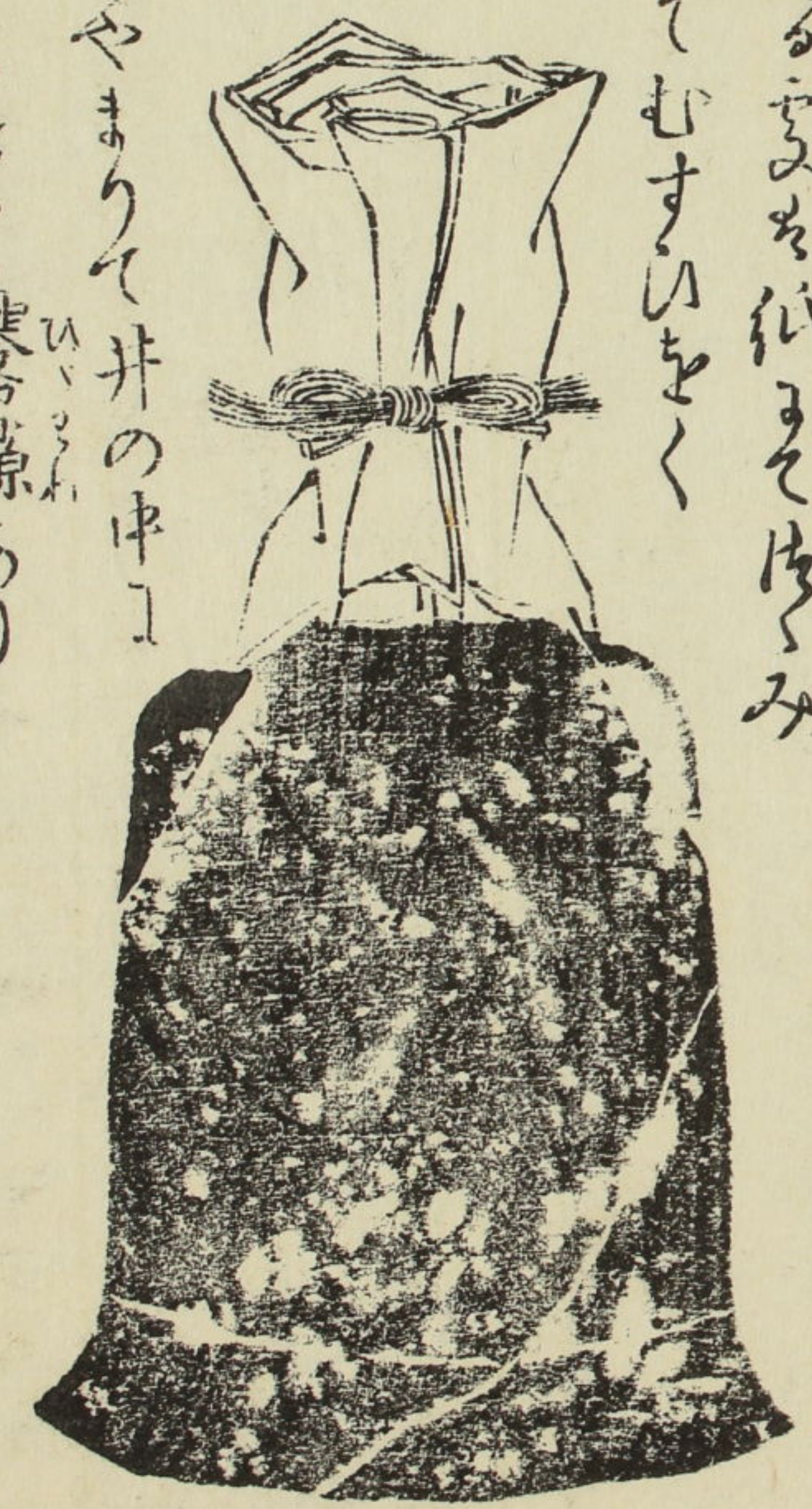
蓮性法師松崎へまうでく法門など談じて語りけるふ
はうりりる本夜たかの闇路やみに迷ふ身なりとも眠ねむるん
たむ忍しのび尋たずねん○雲居うんこ和尚わしもや攝津せつの勝尾
山やまに住すまり 先太守さきのくわのりの招まねにうりて松まつ寫しやに來きり或
人の傳つたへし拙うづ居ま和尚わし瑞岩すいがん奪うばひわりて夜よごと
は雄たけ嶋しまの座ざ禪堂ぜんどうへ通とほひて觀念くわんねんを修しゆへ萩はぎふけり歸
けるがあは人ひと和尚わし哉や誠まことんとも最さい暗あんき夜よをえりて
道の傍かた乃すなは松まつ木きにのぼりて和尚わしはぬる哉やちて木きの
上うへより手てをさしその首くびを攢つかむるに和尚わし立たちまわり
て少すこしも動うごくは志こころづし時とき昼ひるもそのはるまてありし
うばそれ人ひとあはれまう手て哉やたなせしに和尚わしも常とこのぬ
く寺てらへぬりぬそ後のち禪ぜん居まて和尚わしと拙うづ居まのはいづくに
ちげぬるや夜よふけり淋しみしれをばるく通とほひるふ
夏なつ年月げんげつ久ひさしりれをあやもるも有あつらんなど云
しに更さらはなると答こたへけるあるもの己おのれがなせることこの
ふはあるまにそまことななくさぬぐみ問とひすそせし
小和尚せうわし答こたへしゆふや或ある夜よ志こころづく乃すなは事ことありてえし
く立たちてはり居まるが時とき返かへはるどその手てあつるかま
なるや覺おぼへしきは必かならず若わからぬ人ひとなせはいつづる夏なつなる
べしと言いふと持もつ

佛殿ぶつだん 竪たて 戴かぶ 拾とく 壹いつ 間ま 横よこ 拾とく 戴かぶ 間ま 案内記に方丈 二十間十八間 正面しょうめん に
 先さき 太守たうしゆ 貞山ていざん 公こう の尊像そんざう 甲曹かうそう の御ご 袋ふくろ 束むす を法ほふ 前まへ に胡銅こどう
 の正ただ 觀くわん 音おん 天竺てんぢく より傳つた 来ら して往古いやく 松しょう 鷲じゆ 寺じ 開基くわいき の時
 より本尊ほんそん とり 側わき に毘沙門びしゃもん 木像ぼくざう 慈覺じかく 大師だいし 作つく りた
 に二十人にじゅうにん 乃なり 位牌ゐはい を安置あんぢ せりたる 貞山ていざん 公こう 殉じゆん 死し の寄よ 右みぎ
 二十七八人の位牌ゐはい みる 義山ぎざん 公こう 殉じゆん 死し 此輩こゝら の奥おく の間上まへ
 段だん 中段ちゆうだん 孔雀くわんぐわう 乃なり 間ま 文王ぶんわう の間ま 菊きく の間ま 楳まゐ 乃なり 間ま 墨すみ 繪え たる
 鷹たか たる等らう 構かま 子こ 合あ 天井てんけい 欄らん 間ま 乃なり 彫ちゆう 拍ぱく 玄げん 関くわん をまゝま する
 諸國しよこく の名な 匠しやう をあつめり 是こゝ 哉や 造つく り大襖おほすゐ 小襖こすゐ 等の繪え
 も名な 高たか 画工くわこう の筆ふで にして巧妙くわうまう を極きま め精微しやうゐ 哉や 尽つ きて

皆みな 斐ひ 長なが 年ねん 中ちゆう 再興さいかう の造營ぞうえい あり

○火鈴くわしん 瑞岩寺ずいがんじ にある什物じつぶつ 也 高さ七八寸 徑四五
 寸 祕ひ もある鈴かね なる形かたち をはり鐘かね のぬくにして中ちゆう に舌しつ

手て 日ひ 揺ゆ るを紙かみ をはきみ
 水みづ 引ひ きてむすひをく



先さき 年ねん あやまらりて井い の中ちゆう に
 おと〜〜と〜と〜響ひび 隙ひま あり

昔覺滿禪師の時法を修して唐土徑山寺の火災を
救えしむる謝礼として徑山寺より贈れりといふ後右
毎年正月元日曉丑の時に塔頭比丘僧一人これを頸に
かけし両手もてふり鳴りて松崎の村中を巡行を火
災免禳ふの呪法といひり其音清響よき數十丁
の外まづも聞ふといふ

一説俚俗の傳に龍宮城より唐土に傳來しむるを
贈きりといふ今按ずるに古々唐山より命令汝あ
まねし人に觸渡を時よ金鐸といふ拍をふりしこれ
を傳ふといふりあり其圖を見るに此火鈴と同じ

さきば彼方に作りし金鐸なるを

○翁面 かみんのめん これ亦瑞岩寺にあて春日の作と云傳ふ願ハ
口の眼より糸にてつなぐ合せしり松嶋寺天台に五六
堂に舞臺ある時さうこれを甲するといふ時ハ五六百
年より以前の拍なり又公羽嶋といふ嶋も此面の不思議
にこそ名づくといふ後あり
右の外にも仏舍利又鎌倉二位の尼の又仏上人
小贈りぬ法文等什物数多ありといふにち又寺
中厨の竈に邊に火の用心といふを彫る板あり
秋葉山三尺坊乃筆迹といふ近江先住の和尚に

時に去きをかけたり其字體さほぐにうごりたり
 尋常なるべ見ゆるに世の人こそ哉賞羨ま
 ○朝鮮梅 瑞岩す此庭上は二株の梅あり一は紅花
 一は白花なり其花重瓣にしく中よりある葉の外に葩
 の間おとに又少くつゝの葉あり香氣も殊にすぐきなり
 実々三つ四つ又々又つ六つを同じ葉には交て尋常の
 梅子よりハ小く一年よありて十餘も結ぶ事ありさき世
 老樹なほあや年経るに從て実を結ぶ事少くなる
 べて 貞山公朝鮮よりぬひ一時種をばり爰に
 栽させぬふと云秘傳花鏡といふ書にありある品字梅駕

八つ房の梅



鴛梅などいふ種類あるべし品字梅を日本にもありて
そむせ香を突く形奇なるかに 後水尾帝花香実
といふ號を後ふこなむ

○法身窟 無相窟といふ瑞岩寺中にある窟也
竪四間或尺横四間或尺五寸あり最明寺入道は窟に
宿して法心上人と改宗の事を約せりといふそのち
七八十年ほど、嵯峨天龍寺夢窓國師は脚しては
此にあり天台止觀を講する哉睡ふといふ窟の上に
法身夢窓窟は五字の額あり

○經堂 瑞岩寺の内より先住通玄和尚建之といふ

○千佛堂 瑞岩寺の内より本尊木仏釈迦坐像

長戴尺た太に千体乃仏像長四寸云居和尚建
立はといふ

○龍月院 ○護國院 ○寶珠庵 ○圓月庵 ○大光庵

○聯芳菴 ○法雲庵 以上瑞岩寺左の
旁に列す

○萬松菴 ○江月庵 ○香松庵 ○傳曲菴 ○紹隆庵

○得住菴 以上瑞岩寺右の
旁に列す

右十三ヶ菴瑞岩寺乃塔頭なり

○法雲庵の庭上に石二つあり一は長五尺幅壹尺五寸
一は三角形三尺幅とつゝ何れ昔唐僧覺滿禪師此庵

に住せしよあは時僧徒を集めは二ツの石へ水を汲うけ
さる事頼ありれば何れぞと問ふ唐土徑山寺
丹火災何の我水の印を呪しうまきを救ふなりと
水を灌地てやま次第景に至て終りぬその後一二年を徑
て徑山寺より禪師に書簡を贈て其功を謝し禮
物として鈴を贈るこきを火鈴と名はけて今瑞岩寺
よあり

○大光菴の玄関に溪白は二字茂書する扁額あり瑞
岩寺先住唐僧明極和尚の筆なり以庵を松崎す天台
乃時より何を古刹寺なり昔を當村の内大光山といふ

山にありしを再興の時よ々乃此に移せりとを

○觀瀾亭 月見崎といふ所なり 太守の清茶

屋あり 負山公 豊臣太閤より伏見法殿を拜受え

ぬいて此所に移し立ぬといふ柱を形榎乃四方面

也 案内記は唐木四つ 雨奇暗好四字の額 先太守御山公

の御筆觀瀾亭三字は額佐々木文山乃筆あり外圍

乃垣に細竹を網代に組しうを紐やう四つ打十二あけ

といふ是茂貝玉垣と名づく尋常にありしは亦伏見

法殿より移せばありと云 貝玉垣を玉垣に代るの意也
習玉垣と云ふといふ説あり

梅をるに雨奇暗好の四字を宋の蘇軾の西湖の詩

れ出づる西湖の勝槩度山にありて天下第一と唱ぬ
松崎乃風景も日本は何處て第一と稱はるれば西湖
の秀句哉とるる此亭に名づけし最面白

西湖初晴復雨

蕪軒

水光潋灩晴方好 山色空濛雨亦奇

若把西湖比西施 淡粧濃抹也相宜

○陽徳院 瑞岩寺の東北にあり 負山公の夫人田村

太膳大夫清顯朝臣は法娘をここに葬てはるを立るといふ

○獨鈷水 陽徳院の内にあり昔慈覚大師獨鈷を以て

土伐穿しこれに清水湧出るといふ今は大旱もも涸る

るちととが

梅むすに天麟院の境内にも獨鈷水といふありて
傳ふる所まきと同じとされども昔そその沙汰なけ

まば近頃の事とおもる

○天童菴 瑞岩寺の東北にあり本尊十一面觀音

木仏立像長き尺五寸日此作陽徳院殿不持しなふ

佛といふ

○宮千代墳 天童菴の境内にあり高數尺余ぬ

九尺 宮千代といふ童子を葬る所といふ昔此

母とりに宮千代といふ童子あり容顏よくたし

才性柔和にして尋常よかきるおふ天より降臨
するの童子なりとく時の人これを天童と称すは庵ふ
久しく住するおに菴哉も天童と名づけたりそころ
見仏上人侍嶋まで日夜法華を讀誦しぬひし哉
宮千代聴受するより怠らば日哉怪て上人と同しく
讀誦せしが其声清らに正しくえくきく人奇異れ
おひをなせしが上人遷化の後童子も秘なく身おかり
ぬさてまそは側に勧請しなる鎮守山王の化身に
あまゝんなど人といひけりとぞ

梅すはに封内名蹟志は宮城郡南目村宮城野

の戴拾四間東畑中に空地小塚あり里人これを見
墓と號ひ昔松嶋寺の見宮千代とゆふ者此野まで
死を里人憐れこきを埋る塚を築くそ後人乃
好可ふに塚の内にて夢あるをきく 月夜を夜
も草禁は宿ありとらふて嘆く也かくある事
久しかりしが松嶋寺の徹翁とゆふ僧ありそき
ころそれ宮城世の原といひけまばそ後と止し
とぞ又ある人乃説に宮千代宮城世に來りし和歌
の上乃句を得て下れ句哉ゆを久しくあへしそづ
らひ終る病となりて身はうらぬ遺言にふりてその

なほ骸を宮城野に埋むとは二説に據まば宮子代
乃墓ハ宮城野ニあるを信とすべし又似たりされども
皆俚俗に傳ふる所にして孰を是と定め可し

○松嶋明神 今ハ松嶋より北の方高城といふ駅の處
にあり紫明神といふ昔々本宮の内蛇が寄こむ所
まほしきが此處 貞山公の功臣山岡志摩守と云人
の賜たりし在所と云る可敷代に故阿りしそ
家断絶せけま蛇が寄居住此人民を那離散してけり
そ此言城駅に移りし者多かりしは本土の神祠
なきばとく松嶋より乞ひ受て今の處に祭はといふ今

蛇が寄に梨木明神といふあり即往古松嶋明神の右
一跡あり

一説に之桂嶋にあは明神を即古の松嶋明神なり
といふも非なり

○御舟藏 太守の御座船等數艘あり松嶋より高
城へ通路の左に水主町と云數軒ありて是なるを
時く船乗の替古あり

○正海壇 正海壇が峯といふ處にあり天台の僧正海
といふ人の墓なりといふ高六尺周六丈ほどありされども
今も里人も志る者なり

○護摩壇 山王山とらふ所にあり高三尺ほど四方二尺
又寸ちどそ側の大なる窟に十二薬師を建立し
護摩修行ありしと云ふ

○法性院 竹の浦とらふ処にあり ○一華菴 柿が

浦といふ所にあり ○地藏堂 一華菴の前あり

○五葉菴 檜岡といふ處の山中にあり 客殿に五葉

庵三字乃額あり 黄檗木菴の筆あり

○雁金山 法崎の瓦南にあり 二つ川高た峯也 雁乃

飛のふに似しるより名づくといふ 下の海辺に出る処

を腕が崎といふ 其形状人の腕に似しるより名づくといふ

一説に赤馬が法崎の轉びるなり 又一説に茅野が寄
の訛なりと

○あねとり山 松峯の西南にあり 一説は朱鳥の訛也

昔仙人ありし 赤蛇をを玩し 雲といふ

○海無量寺 福聚山と秘を松峯の内南にあり して

大沢といふ所の山乃半腋にあり 瑞岩寺より十余丁

あり 陸を山路に嶮岨なり 舟より行べし 此の庭

あり 沫上の眺を富山小あし ず富山を崎とをま

くながめ 此を近く見る 別に一景の勝地なり

○瑪瑙羅漢 寺中に瑪瑙にて作りし 羅漢の小像

教多あり一つ毎にさほくの密よしてそ細工甚精
妙なり昔唐山より船載くくるを瑞岩寺先住勝雲
和尚肥前の長崎にてほろとゆふ

○羅漢樹 寺中にあり俚俗こきを仏のき。木と云
皮も扁柏の如く葉ハ金松葉に似たり冬を経ても
落葉せびや実黄赤色よく俚形に似たり故に
羅漢樹と名づく唐山にても大ききを羅漢柏といふこの
木木曾山中にありいぬまた又くさまきともゆふ

○達磨堂 ずより上の山の頂にあり俚俗の傳に達
磨大師あの所に坐禪くめふといふ熊耳峯といふ

古に額あり々ハ寺中に納む達磨大師赤衣ハ木
像日本三達磨と秘を片岡和ハ幡城に委とたぐ
三體ありとぞ

○葉山權現 松崎の内苑にあつて禁山といふ委
に河の真山氏勸請といふも年月も志き淑解脱院
といふ額あり

○葉山清水 葉山にあり水清冷よく大旱にも
涸ほりなるとぞ

○湯の原 葉山の辺に昔も温泉ありしが天台
改宗乃後に至りて冷水とすれりといふ數十年前

瑞岩寺先住の和尚癡瘡を患へに夢中に葉山
権現の告あるにさうして此の水を風呂にたて、浴
せしむば速に治しつゝりそ此より人々来りて湯治に
はるかにたゞきつゝとぞされども自然の温泉もあらず
とて焚湯ゆゑ

○八崎 松島の内裏に窓あり大小百余も有べし
とて天台の時僧徒の坐禪などしつゝり此といふ又里
人の穿つて窖蔵とするも多し

○七浦 竹の浦 柿の浦 震が浦 胡桃の浦
生姜浦 片の浦 光徳が浦

○八崎 象鼻崎 小松崎 亀の崎 須崎
法師崎 蛇の崎 津が崎 月見が崎

右の外に天神坊が寄判官坊が寄といふあり
とれ往古天台僧徒の住する所といふ

○すか橋 天童庵のまゝり五大堂つづく此に橋
二つあり一も長三間一も六間何れも幅六尺を有
と那椅子のぬく間をまわしてやうくに足のかいほ
べたぬとありそ下敷板の隙をこして潮満る時ハ
漫々として碧水を湛ふる所にまきをこするもの目眩
は震慄しつゝりぬるもありぬづつと制也

○八幡祠 五大堂鐘樓の側に小祠あり昔々當所
八幡崎といふ処に有しを寛永十七年十一月は交
り移されりといふ類聚國史畿外奉勅宮社の部
に 舒明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅
使 早良連惟保 時疫といふ此時疫癘流行すはにり
て 勅使をたてられりなるべしされバ千三百
年より以上の古社なり今に毎年七月廿一日祭式有
○五大堂 江に近た処に小嶋二あり堂をたてて五
大尊像を安置以大同二年坂上田村磨東夷征伐
しり下りぬふ比建立志すふそは慶長五年 貞山公

刈田郡 白石城を攻め時夢の告あるにりて同九年冬
修覆造営等あり前にいへる 鯉口に乾元元年正月十
日草壁入道勸進五郎為武運長久寄附之とあり大同
二年より文政三年庚辰まづ凡一千十五年乾元元年
より凡五百十九年

一説に田村磨の時毘沙門をかくに安置以五大堂に
慈覚大師の時に至りてこれ残おくそは毘沙門を
飛太ぬひぬ今も唐那といふ所の奥急岡村南光
院といふ修験の処にありとぞ
○御嶋 今も雄岩といひり又小嶋といふ 景行帝

の法時日本武尊東夷征伐の時法嶋に舟をよせ
休息しぬふより佛嶋と唱といふ

一説に 鳥羽院の法時見仏上人は地よ住しむひ
る法力深く神物を役使せしむ事那ご妙
めして 内裏より佛像器物あつびに法衣等賜
りしより 松嶋を法嶋と唱ふといふ一山の碑文
にもは説を用みしよりさきどもそきより以前は古
歌にも松嶋やをいほとよきとる夏多々れは法嶋
の名ハ古記事と見えたり

○渡月橋 法嶋へそくる橋あり長十間余あり古乃

松嶋橋と号なるべし 民部卿忠教の言に ふとて

そよりゆるは法島の夏咲ある春いほはは橋

一説に古の杵嶋橋と々五大堂にあり橋号あり
とゆふされどもいづきを證とまべた相なく今を
何きの橋よそ近地ありに名をなく又松嶋ふ
名をよきとるは外の古歌にも数多あり

○稻荷祠 法嶋の橋乃あなこにあり新法門稻荷

名づく祈る者必冥験ありといふ

○松吟菴 法嶋薬師堂の側にあり一山の碑文に
妙覚庵の舊址よして見仏上人頼賢和尚などの居

まじく 瓦敷なり

○薬師堂

○碑 松吟菴の側にあり高九尺幅貳尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天嶺和尚の文なり天嶺の師通玄和尚は此に位せしが顔破によりてその三十三回忌の時修覆再興せしをといふるを書つる
祐のりそ又其書其るるを觀るにそは

○見佛堂 雄嶼にあり里人これを奥の院とも見え仏上人法華六万部讀誦の道場なり

○坐禪堂 雄峯より圓滿國師こまを建把不住

軒四字の額あり

○頼賢碑 雄嶼の内西南の方にあり世の人を雄

鷲の碑といふ碑惣高さ壹丈貳尺基石乃外き丈幅

三尺六寸五分より四尺三寸と厚七寸あり徳治三年丁

未の春觀鏡房頼賢といふ僧の才子匡心孤運等々

師頼賢の徳行を傳んとく立ちるなり鎌倉建長寺

の住僧一山一寧の文并書あり草體を雜るのけり

又るりなる書なり文ハ甚むといふも典雅にきるに

たろび一山々庵僧に鎌倉に位持せり昔この妙覺

庵に見仏上人住しぬひしが頼賢も亦は此に居る

に〜海山の靈氣を鍾めたる所にありて来るものなるべ
らば博懐として感化発し或る古を志のび今をいと
こ又多父母祖先を慕ひ亡毒殤子哉かなむ貴賤
賢愚となく情あるものなる志のりそ感懐の
動くに従ひ昔を追ひ本を報ふあはれもの試等
の言をなかり愚民に何りそあや〜とすに〜
は佛教に浸淫して無益の所為をなまきよとせ
天下溜く〜こな志のりたがは地は何りては
るれば〜あ〜さで

○孿生嶋 二ツおあ〜び〜似〜る〜の〜名づく〜一〜ハ

あは嶋といひ二ツをたよ書といふ

○屏風嶋 屏風をしてたるぬくある〜名づく

○福浦嶋 此嶋に竹多〜その外よめつ花よら

らざれども挿花筒に作りてあ〜ら〜りな〜といふ

好事の人或る茶杓を作り又尺八如意等哉

製は又一種乃竹あり尋常にか〜り〜中の空を

く木のぬ〜刀眼釘とす〜利用とぬ又〜板を

ゆ〜箸をつくるは此の名おなり松の名におふ嶋

乃中に節志げた竹の緑に栄ゆる〜こと〜にぬ〜

たれ〜ぬ〜にぞ福浦嶋とも名づけ〜なる〜

○毒龍庵 福浦嶋にあり洞水和尚開基本尊不動木佛立像智證大師作弁芝所拈の仏と云信ふ又弁芝の笈といふ托あり高三尺ほど横を尺八寸程上下二段にしたり上段に小地辨天并十六童子の木像ありその長三寸ほどづあり表の四面ともに滅金乃銅をはりて仏像又も雲氣等を彫付たりせよぬいふに近代の托といふべしと見えたり

○毒竜菴記碑 毒龍菴の側にあり享保十九年甲寅瑞岩寺天嶺和尚志を建碑文の大意は此毒龍庵を洞あり和尚修行乃地なるを近交は荒廢

まをを修造落成をふにりて 太守吉村公に請て来臨あり席上に画師周良をめし洞ありの像を画しめ又和奇一首をよみ風景を賞しぬ又は日に調伏壇の竹藪の中より曳出せしなといふるを書つゝねらる文艱澁いゝ浄嶋薬師堂の碑よりゆゑに難し

○坐禪石 毒竜庵の先にあり洞あり和尚坐禪しぬといふ坐禪石の三字を彫付たり

○硯石 福浦嶋にあり長を尺七寸横を尺七寸洞水和尚子習石といひ傳ふるものまれなり

○調伏壇 福浦嶋にあり時頼入道松嶋寺改宗の時天台の僧徒あまよ聚りて時頼を調伏といふ今に熊野神をこふ祭事あり

○徳浦嶋 福浦嶋の東にあり

○經不嶋 福浦嶋の南にあり經塚といふあり古き尺八寸周八尺松嶋寺改宗乃時天台の徑丈を以て變に焼す、塚を築く嶋は名も是に非なりといふ

一説に元弘上人法華六万部をかくに埋めるといふも非なり

○五重塔 經ヶ嶋にあり高き丈或尺五寸享保年中萬人戒供養とて天嶺和尚建之といふ

○公羽嶋 昔松嶋寺天台宗の時五大堂の前以舞臺あり能哉興行せし以翁の面体上をこえて以嶋まぎ飛来るかに公羽嶋と名づくといふ五大堂より此嶋まで体上凡七八下ゆどもへぶちたり其面を瑞岩寺に何と云ふ

一説案内記に昔天台乃時能興好せし翁の面春日の作なりしが故ありて土に埋もせ夜中に光をばちちて以嶋に飛去るよりて名づく

〇旭嶋 あきしま 昔々むかし比嶋ひじまに弁天べんてん祠ひらありしとゆふにそ
跡あとあり

右雄嶋みぎをより旭嶋あきしままでを松嶋まつしまの八嶋やっしまとゆふ七浦しちうら
八崎やっさき八嶋やっしまといふより古よりいひ傳つたへり太たいの外ほかも
名ある者ものたのめ

〇毘沙門嶋びしゃもんじま 昔田むかし村むら磨ま毘沙門びしゃもんの像やぐらを刻きくとの
五ご大堂だうだうの嶋じまに祭まつりりぬひしおそ後のち慈覚じかく大師だいし五ご大だい
明王めいおうを作りて其側そのそばに安置あんぢしぬひしおはあは時とき毘
沙門びしゃもん光ひかりをたぬらる比嶋ひじまに飛とびさりぬひぬよりて嶋

の名といふ大黒嶋おほくろしまえびす岩いわなどゆふ嶋しまの名もは
毘沙門びしゃもん岩いわ乃なる類るいにゆりて名づけたること又またえてり

〇千貫嶋せんくわんじま 昔金賣むかし橘次たち比嶋ひじまに渾まし一晝夜いちしやの者もの
に銭ぜに子こ貫文くわんぶんの利りをばさるより名づくといふ

〇大黒嶋おほくろしま 〇夷嶋えいじま 〇小町嶋こまちじま 〇いせ嶋いせじま 〇布ふ
袋嶋ふくろじま 〇内裏嶋うちらじま 〇すゞめ岩いわ 〇あぶみ嶋あぶみじま 〇鞍掛嶋くらかきじま

〇鎧嶋よろいじま 〇あぶと嶋あぶとじま 〇牡丹ぼたんもち嶋じま 〇小福浦嶋こふくうらじま 〇丸まる
の岩いわ 〇千部嶋せんぶじま 〇鳥羽嶋とりばじま 〇鴻こうの巢嶋のぼりじま 〇堂どう嶋じま

〇阿嶋あじま 〇この己おのれ嶋じま 〇鳥羽嶋とりばじま 〇鴻こうの巢嶋のぼりじま 〇堂どう嶋じま
〇繪嶋えじま 〇般若嶋へんげじま 〇燒嶋やけじま 〇雁かりの祢ね嶋じま 〇塔た嶋じま

行人嶋 ○ 羅漢嶋 ○ 地彦嶋 ○ 大鼓嶋
 鐘ヶ崎 ○ 折鳥嶋 ○ 立志嶋 ○ 釜嶋
 橋ヶ崎 ○ 茶臼嶋 ○ ねや舟嶋 ○ 引通嶋
 屋形嶋 ○ せいがい嶋 ○ 唐櫃嶋 ○ かご嶋
松ヶ崎の 都嶋 ○ 筆捨嶋 ○ 硯嶋 ○ 化粧嶋
内なる みの小嶋 ○ 離嶋 ○ 裸嶋 ○ 引嶋 ○ 在城嶋
 嶋 ○ 内裏嶋 ○ 后嶋 ○ 蛇嶋 ○ 引嶋 ○ 在城嶋
 桂嶋 ○ 駒嶋 ○ 手代嶋 ○ 大吉嶋
大なる 小言嶋 ○ 沖續嶋 ○ 汀續嶋 ○ 佐久嶋 ○ 鐘志嶋
 舞子嶋 ○ 二王嶋 ○ 月星嶋 ○ 松ヶ嶋

卯嶋 ○ 寒風澤 ○ 朴嶋 ○ 馬放嶋
村里多し皆 官戸 ○ 舞嶋 ○ 多嶋 ○ 百合嶋
空風吹と 白當嶋 ○ 毛嶋 ○ 馬放嶋
望金宮の神を 小放火嶋 ○ 帆た嶋 ○ 蛭子嶋 ○ 達嶋
たぬ 摩嶋 ○ 材木嶋 ○ 高嶋 ○ 雀嶋 ○ 榎嶋
権現 権現嶋 ○ なべ嶋 ○ 二嶋 ○ 東風嶋 ○ 西風嶋
 間風嶋 ○ 小黒嶋 ○ 大黒嶋 ○ 犬嶋 ○ 亀嶋
 嶋 ○ つみ嶋 ○ 鏡嶋 ○ 柳嶋 ○ 屋嶋

○のけ田嶋○はのき九の峯○金剛嶋○薩陀嶋
以上村名
詳しうあり

右の峯、大抵松嶋より塩釜まじり舟路二里の
間左太に尺ゆるを志るの敷多々まじり於遺漏も
あるに、又村名なとを村志といはれぬ暇もな
けまばあらくに書志るにぬ必誤もやあらん

○松嶋八景

- 松嶋秋月 雄嶋夕熒 梅浦早春 霞浦飯雁
 - 瑞巖曉鐘 竹浦夜雨 塩竈暮煙 江縣残花
- 古歌

至陸奥見松嶋又海中有奇嶋往昔日本武

尊至此嶋國首國民崇之言御嶋 上宮太子

松嶋哉御嶋者不見止日標方之月之都之外于尋者

和奇本紀下 上宮太子ハ即聖往太子の伝ありと云
家隆朝臣

秋の秋乃月やをくまのあはれ系ゆきとをた仲乃つり舟
あけくる哉はれ松の木の色より雲はたぬく阿毎の船系

皇太后宮大夫俊成

立更り又も来る人松嶋やをく海の台を波にあはれ
木を考やをくまう破にまはけ月乃氷の干をなくたりの
昔より陸奥に奇枕多くとある中にも松嶋の八天

下才一の名勝なきが代々の集に載る古人乃
歌數多たがねにあくまもりけ 志しりし書にみえり 歌述聞老
詩に至りてはこゝ國風にあつるゆゑにや古人
の賦詠多うしてそ勝槩を敵にべれ佳作を更
にふく度土にえの代乃詩人一絶句あり

薩天錫

風光招我海山阿 拍手吟魂奈句何
御嶋烟波松嶋月 到茲捲舌富樓那

相摸川 山原坊

松崎やさそまつははやまきまのや

或云芭蕉翁は比に来りて風景を賞せしが詞
の及むざるを去りて終に一句を以てして
去りぬゆゑなる家以歸りて後を得たる句と
す

草よさを誰まのしぬそをくさる

- ▲産物 ○福浦嶋の竹比にえり ○岩長生昂巻相
- 石斛即凡常 ○城垣草即海列骨碎
- 寒さるる麻角菜 ○水飴 ○茶葉 ○紅蓮せん
- るん 粳米を製し扁く圓くく 満月の形に作り
- 火にあぶりて果子とて昔は村浪荒濱乃百姓掃部

石斛



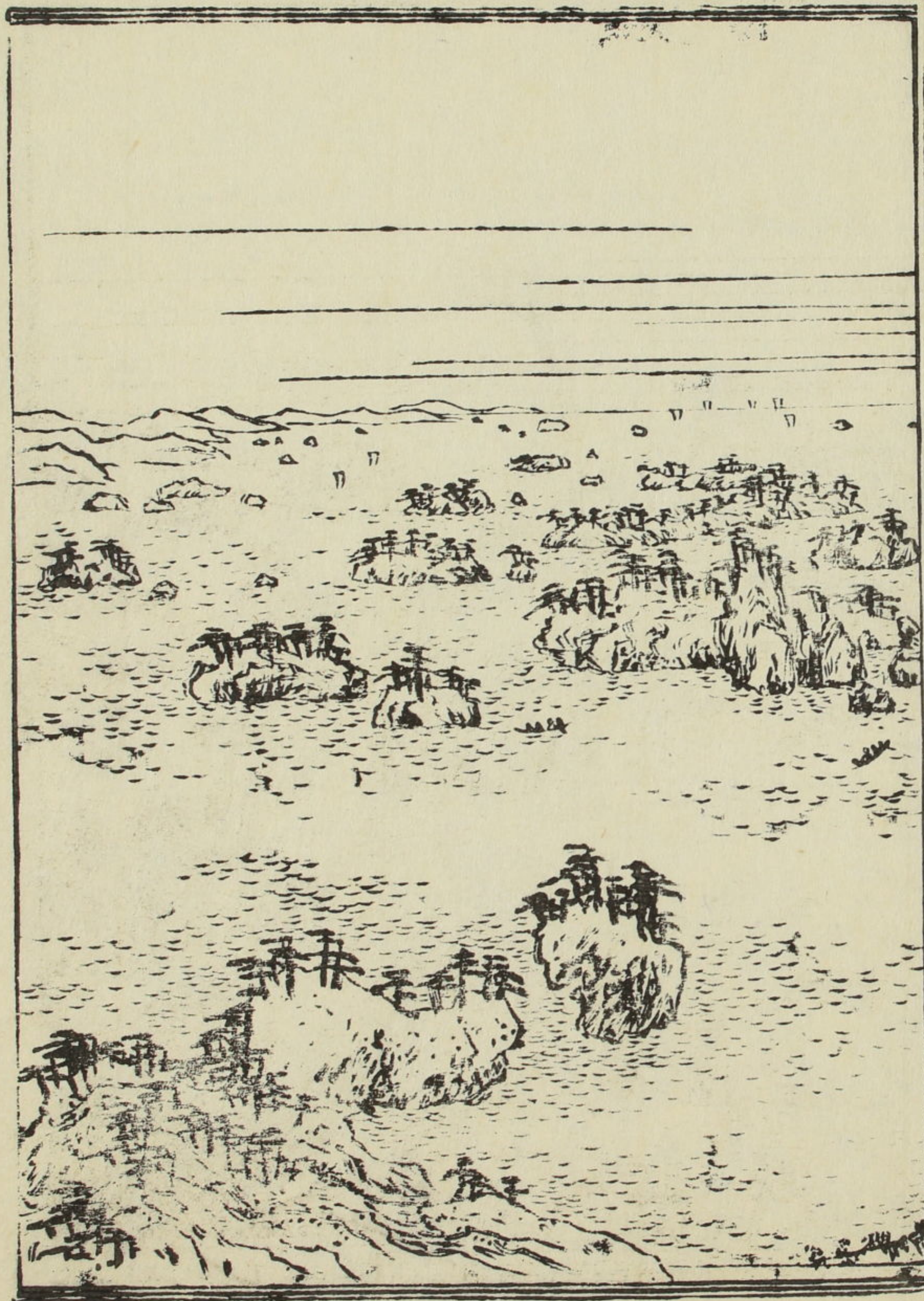
とひふ者の子小太郎といひしが羽州象深の人の娘を妻に約しそいまだ婚義とらぬへざる前に小太郎病まゝ死しけまばを女に賣れりたり剃髪し紅蓮比丘尼と称し瑞岩寺の南に庵をむまびは果子をんとぬて賣るを紅蓮せんをいと名づく今心月菴といふ寺ありその住居せし跡なりとぞ果子を今も作りて賣るありは村の名おとい

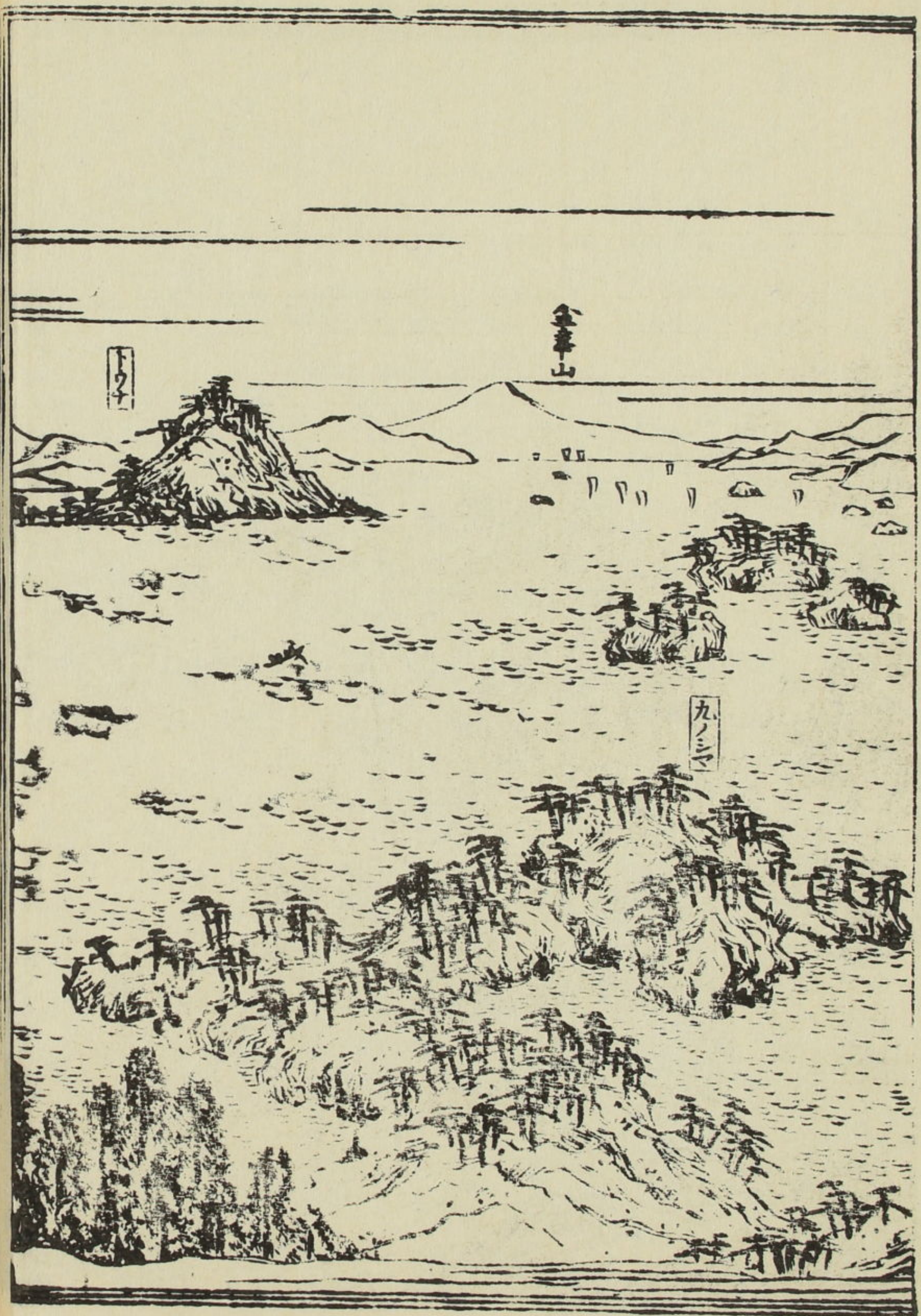
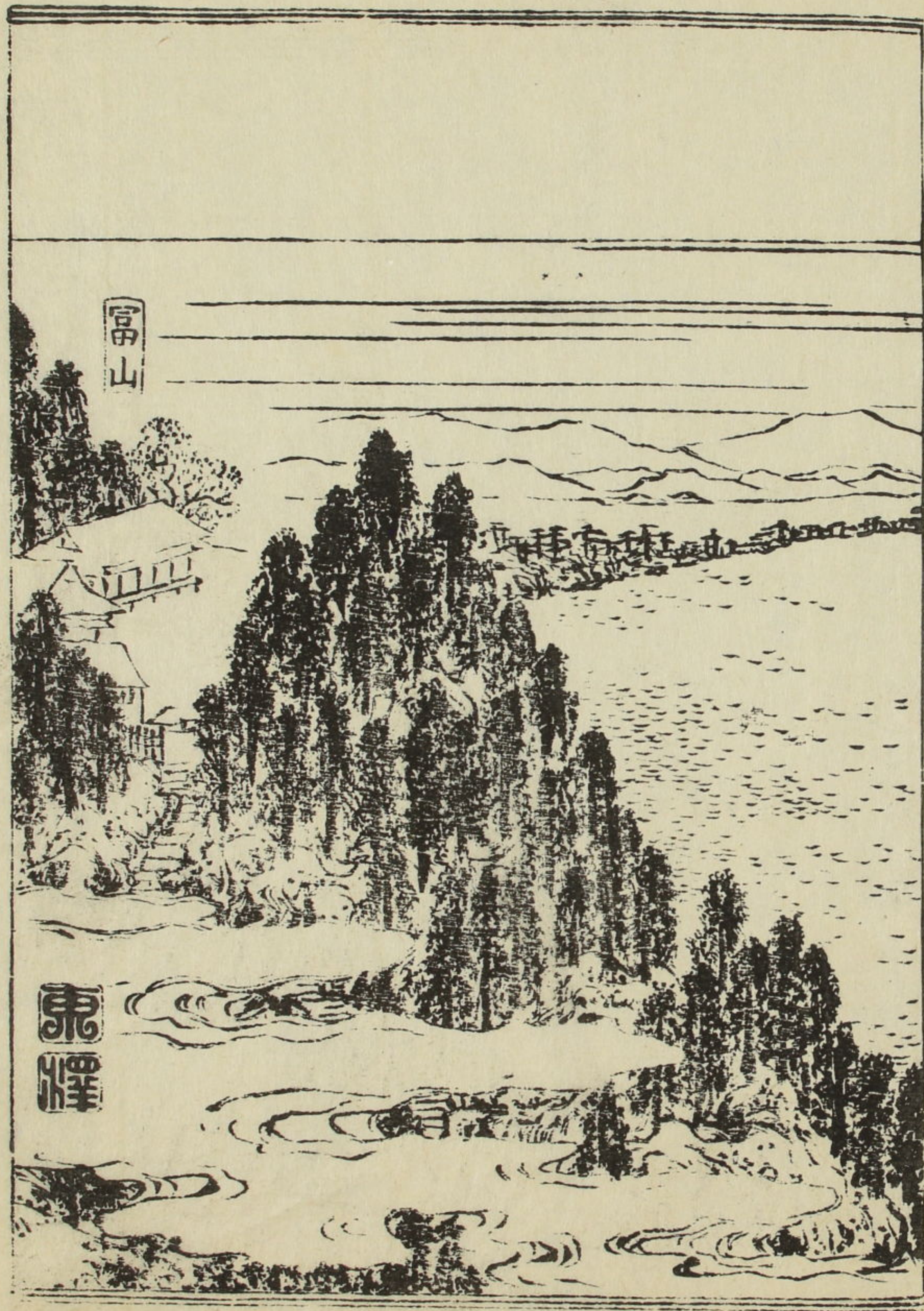
△路程 江戸より松崎よぐ丑の方九十九里 ○仙臺城下より丑寅の間六里半 ○千賀の塩竈

北の方戴里半法陸ともに里數同じ遊定を必
舟路を通るべし奇觀多し陸路もさせば嶮岨
多きをく○利府驛仙基城下より
李考通話より丑寅の方戴
里半

松よりより高城驛より丑の方半里○同富山まで
寅の方戴里舟にのりゆくとともに
舟との陸路をあり○同金花山まで寅卯
乃間二十里舟上も日ど里數をきども松考よりそぐさほにゆ
舟をなく唐那よりゆれまごのるべしさまども風波
穏ちるる○同石の巻まづ八里半

○富山 松崎の東北手檜村の内にあり海岸に出て
高た山なり木立深くく晝といどもぬのくくく
半腹の大仰寺と云ふありその院中より眺を以
ては松考の海岸庭上の泉ありぬく浮める鳥く
目の下いこちくく松乃録も手に摘むべしと云ふ
そ風景詞のねもふべたにあくぞおに古より松嶋の
風景も富山のありといりせ余遠近の眺をハ东南
遙に大海の天と一色なるをなる父遠を右よハ相
馬の諸山より近き唐那の二ツ森まろ數百里の福
あつたたに遠近も金花山ちうたも日和山にいり





おびく皆足をあげてふむべしとおもはる又漢舟のり
のふも落葉の流るが如く鹽屋のけりも風にな
びたて雲ともいれたぬびくさはいちんうこちなり

○大仰寺 寛文年中瑞岩寺洞水和尚開基瑞岩
の末寺臨濟宗なりはさの倉上乃眺望世にまじなる
奇絶上に述るる如く

○富山觀音 山の頂上にあり大同年中田村磨建
立しるふ奥に三觀音の一と云ふ牧山 麓岳側は田村
將軍の像あり馬のり甲冑を帶せり俚俗の傳は
田村將軍大竹丸といふ鬼を退治しむは雲に骨

をうつめく堂をたてくふと云ふ

右富山も手樽村の内は松岩の地はあり後
にも山上の眺を松嶋を一瞬に又たろく昔より
松岩の景富山にありといひたろくハせるにありて聊
たりに附記す

文政三年庚辰四月

仙臺

鼓缶子述
東澤 圖

松嶋圖誌 終

文政四辛巳年七月出版
 明治二十一年七月三日印刷
 明治二十一年八月廿五日再版

定價金拾八錢

著作者 故 櫻田周輔

發行者 宮城縣平民 白木曆

印刷兼發兌者 全 山水音四郎

發賣書肆 仙臺中國分館百四 有千閣

大賣捌所

宮城縣宮城郡松島村松嶋
 松嶋物産店 淺野甚之助 書林 鈴木才治

全 支店 全 一貫堂

休宿所 全 觀月樓 旅入宿 海老屋藤藏

休宿所 全 鈴木屋峯治 全 停車場前 支店

松嶋物産店 全 鈴木長藏 全 停車場前石卷

全 千葉善助 休宿所 淺野屋支店

